

現代日本語における敬語の起源の形跡

尾 鼻 靖 子

I はじめに

本稿では、敬語の起源とその背景を探索することで、敬語の持つ本来の意義と機能を明らかにし、それが現代日本語にどのように反映されているのかを吟味したい。宮地（1981 [1992]: 6）は、語彙などの変化はあるにしろ「敬語体系の大局は不変」であり、「敬意を表す」点も不変であると述べているが、現代語における敬語現象は必ずしも敬意ばかりを表しているわけではない。例えば、スピーチレベルシフト現象に見られるように、話者のストラテジーとして皮肉（Okamoto, 2009）や冷ややかさ（Barke, 2011）も表現できるし、相手に対して弱い立場が敬語を使うことで力関係を証することもある（メイナード, 2001）。とはいえ、これらは決して敬語の例外的使用ではなく、敬語の根本（起源）に通じるものがあり、社会的敬意を表そうと否定的感情を表そうと、共通の要素があって生起する現象であると筆者は主張する。

本稿では、敬語の起源を調べることにより、現代敬語の様々な使用と多様な語用論的意味の原因を模索する。何故「疎」の人に敬語を使うのか、普段敬語を使わない相手（例：部下）に対して公共の場で敬語を突然使う起因は何か、又親しい友達に心から礼を言う時に敬語が生起する因子は何か、敬語が使い方によっては皮肉や冷ややかさを表すのは何故か、などの疑問を敬語の起源に求め、解明したいと思う。

本稿では、すでに尾鼻（2016）やObana（2017）でも述べたように、現代における敬語という言語形式は、「敬意」を本来所有しているのではなく¹⁾、話し手が相手に対して取る社会的あるいは心理的距離を示す指標に過ぎないという立場を取る。太古における敬語は、確かに神々を崇めまつるための特別な言語形式に帰し、それは神と人間と絶対的な距離を図る言語として発生している。しかし、現代敬語は、様々な社会的関係、対話の条件や状況、話者の心理状態など、多様な要素がからんでいる。それを話し手が把握して相手に対して両者の距離を示す指標が、現代敬語の基本である。その距離関係が上下関係であったり、公共の場であったり、親疎であったりする場合、その状況に適切な距離を取る

1) Jautz（2013）は、thank youという言葉もコンテキストによっては相手が話し続けるのをやめさせるシグナルであったり、皮肉にも冗談にも使用され、その決まり文句（formula）に感謝の意が本来備わっているわけではないことを指摘している。敬語も同じように、コンテキストにおける話者のスタンスが敬意として伝わるのであって、敬語の語彙イコール敬意ではない。

ことは敬意を表すこともあるが、故意的なあるいは不必要な距離を取ることで相手への侮蔑や怒りにもなったりもするのである。又、敬語は、ストラテジーを用いて構築した発話を文法的に転換させた markings (符号、印、指標) である限り、敬語 (正確には敬語化) という「指標」そのものには意味論的な内容はなく、環境 (対人関係、発話の状況、話者の心理などを含む「発話にまつわる条件」。以下「環境」と言う言葉で表す) に応じて異なる社会的・語用論的意味解釈をもたらす機能を主に持つと筆者は考える (Obana, 2017 参照)。

以上を踏まえて、本稿では次のように議論を進める。まず次節では、敬語の起源を浅田 (2001, 2005, 2014) が唱える祝詞説に求め、敬語は神々に対して畏怖、崇め、訴えなどを表現するために発達した言語形式である点について言及する。第Ⅲ節では、現代敬語は、規範的な使用がある一方で、皮肉や冷やかかさなどを表す場合もあり、これは一見従来の敬語使用から逸脱しているように見えるが、敬語の起源を多分に維持している点を例を挙げながら検証する。そして第Ⅳ節では、現代敬語の規範的な使用 (つまり敬意として使う礼儀の敬語) とその他の多様な使用 (否定的感情など) との密接な関連について議論し、その両者は決して別個のものではなく、両者とも敬語の起源を保持し、しかも同じカテゴリーに属する「連続体の両端」 (“Two ends of a continuum”, Obana [2017]) を成すものであると主張する。

Ⅱ 敬語の起源

金田一 (1959 [1962]) は、敬語の起源は「タブー」にあると述べている。金田一はアイヌ語の例を挙げて、悪霊から守るためあるいは社会における掟のために対象を別の言葉で表現するという風習が敬語の基であると主張する。例えば、婦人が使用する言葉には夫の名前を口にすることがタブーなので、影をつけていう言葉が「イオクルシテ」(敬語) になった (金田一, 1959 [1962]: 29) という。

「タブー」という言葉はポリネシア語群の言語であるトンガ語の言葉、‘tabu’ に由来しており「inviolable (犯すべからざる)、sacred (神聖な)」という意味だと言われている (Oxford Dictionary of Sociology [p.752] より)。社会の秩序を守るための抑圧であるとも、社会の類別・格付けのために発達したともある。現代日本語でも、結婚式において「別れる、切れる、去る」という言葉が忌み言葉として避けられるのもタブー語のひとつであろう。

確かにタブー語を避けて別の言葉で表現するのは、ポライトネスの方向である。「死んだ」と言わずに「亡くなった」という言葉を使うのは、遺族に対しても死者に対しても思慮のある言葉の選択であるからポライトネスストラテジーと言えらるだろう。しかし、金田一が日本語の敬語起源を解く際に、何故アイヌ語に焦点を当てて、その言語におけるタ

ブー語の例を挙げたのであろうか。言語類型学では、日本語とアイヌ語は同族言語群に属さないというのが定説であるし (Concise Encyclopaedia of the World: 15-16)、アイヌ語のタブー語を紹介しても日本語にそのままあてはまるともいえない。もちろん古代・中古時代に日本語においても人名を表記する代わりにその人物の宮廷での役職を記す風習があり、それはタブー語に等しいものだといえるであろうが、それはアイヌ語に限らず、他言語にもある現象である。すると、日本語の敬語の起源を調査するのに、何故アイヌ語を考拠としたのか、というのが疑問として残る。

さらに、タブー語というのは断片的な語句に限られている。文法的にも語用的にも広範囲に存在する敬語の現象がタブー語という狭い範囲の言語現象に起源を発するというのは、無理があるのではないか。又、上代の敬語は絶対敬語であって、階級を示す言葉である (渡辺, 1973; 櫻井, 1983)。ならば、上位の人の行動や様子の描写が全てタブーというのでは少々無理があるのではないか。又、タブー語がどのような経路を辿って身分制度を表す敬語に発達したのかも明確でない。さらに、社会学ではタブー語というのは社会的秩序を守るために抑圧をかけた言葉と定義されているが、それを敬語に適用すると、階級制度を表す敬語とは上位者に抑圧をかけた言葉となるが、果たしてそうだろうか。

タブー語というのは階級に関係なく、社会全体に通じるいわゆる迷信的な根拠から生み出された言葉である。悪霊を避けるため、社会の秩序を守るため、人々が創り出した民俗的な所信、信心である。一方、階級制度を表す古代の敬語は、タブー語ほど社会的な普遍性はなく、一部の階層にだけ使用された言葉である。そうすると、敬語の起源がタブー語という説は説得力がないように思われるのである。

村上 (1977) の説を基に西田 (1998) は、古代敬語が神と祭祀を行う天皇のみに使われていた事実を述べている。そして浅田 (2001, 2005, 2014) が、敬語は祝詞に起源を発すると主張している。祝詞はアニミズム信仰時代にすでにやおよろず (八百万) の神に捧げるウタ (下記参照) として存在していたという。諸説があるとはいえ、祝詞の存在は1500年ほど前まで遡るとも言われている。祝詞とは「神に捧げる祈りの言葉」(浅田, 2001: 175) であり、その祈りの言葉に敬語の萌芽が見られるというのである。

祝詞に見られる敬語は、絶対的存在の神々に対して使われたのであるから、現代敬語に見られるような聞き手に対する丁寧語 (デス・マス) は存在しない。つまり、相対的な人間関係ではなく、絶対的な存在である神々への敬語だから、丁寧語が存在しないのは当然であろう。この丁寧語は8世紀ごろまで存在していなかったと言われる (西田, 1998: 47)。

又、日本語の敬語は「絶対敬語」で始まったと言われている (金田一, 1959; 渡辺, 1973; 櫻井, 1983; 西田, 1987 [1995], 1998; 浅田, 2014)。敬語が絶対的存在である神々に対して使う言葉として発達したのであるから、相対的な要因 (人間関係や社会的状況など) は一切関係ない。そして、天皇制度が確立し始めると、天皇は「基本的には祭祀王の

性格を備えていた」、「天皇自身は、… 新嘗祭などの祭りごとで神と交流し、神と一体化する、この国の最高祭祀であった」（村上、1977: 49）。だから、神と一体となって祭祀を行う天皇に呈して敬語が適用されるようになったのは自然な流れであり、ここから敬語は身分制度を示す言葉として発達していく。西田（2003 [2013]）によれば、奈良時代でも自敬語があったという。身分の上位者が自分の身分を表す指標として自敬語を使用していたのである。これも絶対敬語の現象のひとつであろう。以上のように古代敬語の特徴を考慮すると、神々に祈るために発達した祝詞に敬語の起源を求める説は、非常に説得力のあるものであると思われる。

次に祝詞に現れる敬語使用の特質について述べる。浅田（2014: 70-84）は、祝詞は現代でも朗々と歌い上げるように捧げるが、それは、神がソトにいるからで、ソトとは距離があり神は上にいる。その神に向かって「ウタウ」時ピッチの高い声で、音を伸ばし、朗詠するので、「ウタ」とは神への訴えであると説明している（「ウタ」と「訴える」とは同語源であるという。又祝詞は大抵は戸外で空にいる神々に対して訴えるから、朗詠するのも自然であっただろう）。だから、「ウタ」とは、神との距離を空けることによって神への畏怖の感情を表明するシステムであったという。八百万の神とは、自然の神々である。天災は神の仕業であると信じられていた。自然災害の前では人間はひれ伏すしかない。だから祝詞を通じて神に怒りを鎮めるよう訴えたのである。

一方で、豊作も神の恵みと考えられていたから、神に対して多くの敬語を使って感謝の意を唱える。供物を捧げ、神を褒めたたえるのである。病気や死も神がもたらすと信じられていたから、神に祈願して病気を治してもらおうと祝詞を唱えた。だから、病気が治ると、それは感謝となり、神を称えるのである。

神々への祝詞は、他の宗教のような経典や聖書、コーランなどもなく、又、神が人間に命令したり戒律を施したりするようなものではないという（浅田、2014: 95）。祭祀を取り仕切る人が形式にのっとって神に訴える言葉を創っていたとあり、現代の祝詞も同じような様式を維持している。つまり祝詞は、神々の怒り（災害、病気など）を鎮め、神々を称え（豊作、子孫繁栄など）たり、又山海の産物を供えて依頼したり（病気を治してくれなど）するために訴えるものとして発達したとある（浅田、2014: 91-98）。しかし、神々は人間の力の及ばない絶対的な能力を持つために、畏怖の念を持って訴える。それで畏れから慎重に言葉を選び、言いよどみを表す繰り返し語（例：集い集い、はかりはかり）などもあると浅田は述べている（浅田、2001: 179）。さらに浅田（2001: 186）は、敬語という形式を正しく使いさえすれば、神には何でも頼める。中には呪いの言葉もあったり、祟りをもたらす神には「出て行ってくれ」と丁寧に訴えたりもできたと説明している。

神々に対して訴える言葉として発達した敬語は、その使用動機として次のようにまとめることができる。

- (1) ソトにいる神には距離がある（そして戸外で祝詞の朗詠が行われる）。

- (2) 神は絶対的な上位にある。
- (3) 神という存在は畏怖の念を起させるから慎重に接する。
- (4) 神の恩恵には感謝を述べ、称える。
- (5) 神に依頼する場合には言いよどみながらも神を崇めて、より丁寧な言葉を選ぶ。
- (6) 神に供物を捧げて細やかな気配りをする。

これらの祝詞における敬語の使用動機は、現代敬語使用にも通じるものがある。ただし、渡辺（1973）が述べているように、古代の敬語は、「話手の側に属するというよりは、多分に対象の側に属する」（渡辺，1973: 19）、つまり古代敬語は、現代敬語のように話し手が相手をどのようなスタンスで扱うのかに応じて変化するのではなく、相手の身分に応じてそのアイデンティティの指標として自動的に浮上する言語形式である。祝詞における敬語はそれよりさらに「神々」という対象だけに向けたものである。だから、古代の敬語がそのまま現代敬語に適用されるわけではないが、祝詞を上げる際に敬語を使用する「動機」は、現代敬語の使用動機と相通じるものがあると筆者は推察する。この点について次節で例を挙げながら考察したい。

Ⅲ 現代語における敬語使用の動機

まず、社会規範的な敬語（上下関係、親疎関係、公共の場に関わる敬語）について検討する。敬語に限らずポライトネス現象は、基本的には社会的であれ、心理的であれ「距離」の問題であると言われている（Ikuta, 1983; 蒲谷, 2003 [2013]; 熊井, 2003 [2013]; 滝浦, 2005）。Brown (2011: 10) は、韓国語の敬語の根元的な意味は“separation or distance”にあると述べている。敬語は、上下であろうと水平であろうと話し手が相手との距離をどのように取ったかを言語的に表したものであり、規範に適った敬語使用は相手との社会的関係を適切に示す結果となる。櫻井は現代敬語の基盤は「商業主義」（櫻井, 1983: 3）だと述べているが、例えば客に対して敬語を使用するのは、客が商業的には上位とみなされているからである。萩野（2005）は、上下とは身分や職業の貴賤のことではなく、例えば教師と生徒では教師が恩恵を授ける役割としての上位と述べ、さらに親疎関係においても知らない人は上位と見立てるとまで主張している。上位と認める相手に敬語を使用するのは、敬語の起源である神々を上位として崇める動機と相通ずるものがあると言える。

公共の場で敬語を使用するのは、「改まり」（南, 1977; 辻村, 1989）を表意すると言われている。公共の場では親疎や上下関係に関係なく聴衆に向かって礼儀として敬語を使用するのであるが、これは前節の「祝詞の朗詠」（つまり、舞台上で上演するかのように朗々と神に訴える）につながるものがある。公共の場とは話し手が舞台上に立たされているのと変わらない。だから同僚が対象であっても公式の会議で敬語を使うことで、舞台的な役割

を遂行していることを示しているのである。そのために一定の距離を取っているのである。尾鼻 (2016) 及び Obana (2016) は、task-based roles という用語を用いて、例えば、所属する会社の会議で議長役を任されて、議長としての役割を遂行する際に敬語を使用する時、それは議長が複数の会議参加者に向かい合っているという一種の儀式的な「環境」(いわゆる「公共の場」)を把握しているからであると述べている。だから、親しい同僚には普段は敬語を使わなくとも、会議では使うのである。社長が社員に年頭の挨拶のスピーチで敬語を使うのも、同じく一時的な儀式的環境を把握して、そのタスクを遂行するには「距離」を取る必要があるからである、と論じている。このように「公共の場」で敬語が規範的に使用される現象は、敬語の起源である「神々というソトの存在に対して、儀式として戸外で祝詞の朗詠を行う」という点と通じるものがあるのではないと思われる。

親疎関係では、「疎」の人はソトの人であると見做すからであり、親しくない相手の領域に侵入することを避けるために敬語を使用する。それはお互いに「疎」である両者を安心させるという社会的心理を反映している。知らないソトの世界の人間には警戒心があるから敬語でもって相手を話し手の領域のソトに置くとも解釈できよう。古代の神々は人間が推し量ることができない行動を取る(災害や死など)存在である。だから畏怖の念を持ったのであるが、現代敬語の使用に警戒心が存するという点と同列的であろう。

次に同コンテキストで普通体からマス/デス体に移行する、あるいは敬語を使用しているコンテキストで敬語のレベルがさらに上がる現象について考察する(この現象に対して「プラスレベルシフト」という用語を用いることにする)。例えば、Okamoto (2009) は、敬語が皮肉を強調する例を提示している。敬語そのものには皮肉の意味はないが、敬語使用によって話者の皮肉的意図がより強調されるというのである。又 Shibamoto-Smith (2011) は、政治的議論の中で自己防衛のために相手に敬語を使う例を挙げている。さらに Barke (2011) は、ドラマの会話を調べることで、相手に対して「冷静に抑制した」態度を示すものとしてプラスレベルシフト現象があると述べている。メイナード (2001) は、テレビドラマにおける普通体からマス/デス体にシフトする例の中には話し手の弱さや脆さを映し出しているものがあると報告している。これらに共通する要素は、相手から故意に心理的距離を取ることで自己を守る手段として敬語を使用しているという点である。皮肉さえも相手から直接反駁されるのを避けるために間接的に批判している²⁾ (“an indirect form of speech” by Jorgensen [1996: 614]) という点で一種の防御対策である。祝詞における敬語は自己防衛として使われたわけではないであろうが、人間が神々の前ではひたすらひれ伏すという弱さや脆さ、しかし祝詞を朗詠するだけの余裕や冷静さも全て含めて、人間が神々から距離を置いて祈りを捧げた点は、上記のプラスレベルシフトの心理的動機と通じるものがあるように思われる。

2) 皮肉は間接的な発話体を用いるが、実際には直接的な批判よりも批判の度合いが高いと言われている (Toplak and Katz, 2000)。

石崎（2000）が重要な内容であればあるほど敬語が使われる例を提示し、それは相手に対して慎重に接していると解釈している。似たような現象は、Obana（2016）の依頼の例にも見られ、依頼に対して「それはどういうものなのか」と応対をする時に構える態度を表すものとして普通体からマス/デス体に移行するのは、慎重になった時の心理であるとObanaは指摘している。このように、話し手の心理がプラスレベルシフトに現れる現象は、前述の祝詞に現れる神々への畏怖の念や慎重さと同質のものと言えないだろうか。同じように竹田（2011）は、異なる話題に変更する時にプラスレベルシフトが起きる例を提示し、それに対して相手の気持ちを汲んで、慎重に新しい話題を提供しているからだという解釈をしている。又、Geyer（2008）が生活協同グループの人たちに依頼をする際に丁寧語を使用するのは、“to impersonalize the speaker by framing the request as official, and therefore, not personal”（Geyer, 2008: 58）ということを強調するからであると述べている。これも聞き手に慎重に接している心理を表している。

Cook（1996, 2008, 2011）は、プラスレベルシフトが生じる話者の心理を“public-mode”あるいは“acting on-stage”という用語で説明している。例えば、普段普通体を使用する大学教授が指示を出したりする時に舞台上に立っているかのように「公」の役割を演ずる証として敬語が出現する例を挙げている³⁾（Cook, 2011）。同じように、友達のグループ活動で誰かがアナウンスする際に「さあ、皆さん、ちょっと休憩しませんか」と敬語を使うのもこの舞台的な振る舞いが心理として働いているからであろう。これは規範的な敬語を公共の場で使用しているのと同根であり、又、敬語の起源として挙げられた「戸外で行う祝詞の朗詠」につながるものだと言えよう。Obana（in press）は、友達同士がインタビュー側とされる側という立場に立たされた時にお互いに敬語を使う現象を例に、普段は普通体で話す両者がレコーダーを前にインタビューする場面では「公」の役割（タスク）を演じているからであると結論している。

Obana（2016, 2017）は、友人同士でも心から感謝している時にプラスレベルシフトが起こると述べている。敬語を使う上位の人に対しても、感謝の辞を述べる時に敬語のレベルがさらに上がることがあるが、これにも同じ心理が働いていると思われる。三輪（2000: 95）は、「ありがとう」と「ありがとうございます」の差は、英語のthank you, thank you very muchの差と同じでないと述べている。確かに上下関係などが認識される環境では「ありがとうございます」は上下関係を明確にする。一方、英語の場合はどのような環境でもvery muchは感謝の度合いの差を表しているだけである。しかし非敬語の世界（家族や親しい友達）で、「ありがとうございます」というプラスレベルシフトが生じた場合は、その敬語使用によって感謝の度合いが高いことを示しているのではないか。もちろん

3) Cookはそれを教授としてのidentityを強調していると解釈しているが、元々普通体を使う理由が学生に対して同レベル的に親しみをもつスタンスを取っているのにも関わらず、教師の本分である教えるという時に教師のidentityを強調するのは「教師」という立場を改めて学生に知らしめることになる。筆者は、慎重な態度としてのpublic-modeと考える（詳細はObana, 2006: 253-254参照）。

ん敬語を使わずに「ほんとにありがとう」と強調する副詞を代わりに使うことも可能で、それは社会的に義務付けられたものではなく、個人の選択にゆだねられているが、この場合には「ほんとに」という言葉と「～ございます」という敬語は感謝の深さを示すという点で語用論的に同意義であろう。

IV 規範的敬語とプラスレベルシフトの連続性

前節では、現代敬語の社会的役割や語用論的解釈は、敬語の起源の要素を多分に保有しており、これは social norms としての敬語（いわゆる敬意を表すポライトネスとしての因習的な敬語）であれ、プラスレベルシフトに現れる敬語（話者の心理変化を示す一時的な敬語の使用、あるいは敬語環境で敬語レベルが上がったりする）現象であれ、同じように敬語の起源の足跡が見られることを説示した。そして、プラスレベルシフトの敬語も規範的な敬語も同列の語用論的效果を呈することも例を挙げながら指摘した。これをまとめると次のような表になる。

表1：敬語の起源、規範的敬語及びプラスレベルシフトにおける敬語の関連

敬語の起源：祝詞に現れる敬語の背景	現代の規範的敬語の使用動機	一時的な現象としてのプラスレベルシフトの背景
神々はソトに存する遠い存在	社会的距離	心理的距離
神々は絶対的な上位	上位の人に敬語を使用	
神々への畏怖の念	疎の人に対して距離を取る	自己防衛手段（脆さ、冷静さなどを保つ）、皮肉、一時的に気持ちが離れる
神の恩恵に対して感謝の辞を述べる		深い感謝の念を表す
祝詞を戸外で朗詠	公共の場	「公」の役割を果たす場合、グループによびかける場合、舞台演技を装う場合など
神への依頼（最上の敬語と言いよどみ）	依頼のもたらす相手への負担が大きいと敬語のレベルが上がり、言いよどみが増加	依頼を慎重にする、言いよどみが増加

表1における三者全てが相合するわけではないが、敬語の起源、つまり神々への敬語使用の動機は、現代語における規範的敬語の使用の背景とは同系列であり、又現代語において敬語を話者の心理的变化を表すものとして使用する動機とも呼応するものであることが分かる。つまり、規範的敬語とプラスレベルシフトの敬語は、別個に存在するわけでも、後

者がまったく逸脱的なユニークな現象であるわけでもなく、連続体として同じカテゴリーに集約されると推察される。Obana (2017) は、これを“two ends of a continuum”と呼称し、両者の共通の軸は「距離」（社会的であれ、心理的であれ）であると述べている。

規範的敬語とプラスレベルシフトを同じカテゴリーに属する連続体と認めた上で、次に両者がどのような関連を持って連続体を成しているのかを調べる。これを説明するのに Bicchieri (2006) が社会的規範を定義付けるのに命名した“grammar of society”を適用したいと思う。

Bicchieri (2006) は、社会学の研究において social norms について次のように言及している。

like a collection of linguistic rules that are implicit in a language and define it, social norms are implicit in the operations of a society and make it what it is. Like a grammar, a system of norms specifies what is acceptable and what is not in a social group. And analogously to a grammar, a system of norms is not the product of human design and planning (Bicchieri 2006: ix)

つまり、Bicchieri は、social norms とは言語における文法規則のようなものである。文法は言語現象に内在しているものであり、言語使用が適切であるかどうかを指摘するための基準であるが、social norms も社会行動に内在しており、その行動が社会的に受容されるかされないかを判断する基準であると主張している。ただし、social norms は信号のように一対一に対応する規則ではなく、ある一定の標準を示唆しているだけであって、場所と時、共同体ごとによって変化し柔軟性に富み、又、時代とともに大きく変化することもであると述べている。一方で、social norms は社会という組織を円滑に成り立たせるために人々を抑制する力もあり、グループにおける個人の行動はこの social norms によって規制されている点も強調している。

ポライトネスも同様である。我々は人とのインターアクションをスムーズにするために social norms としてのポライトネスを用いる。しかし、一方でポライトネス現象は、インターアクションの起こる「環境」によって変化し、受容の差も生まれ、柔軟性のある現象である。しかし、だからといってポライトネス現象が荒唐無稽に存在しているわけではなく、やはり軸となるものとして social norms が根本を成している、と筆者は考える。

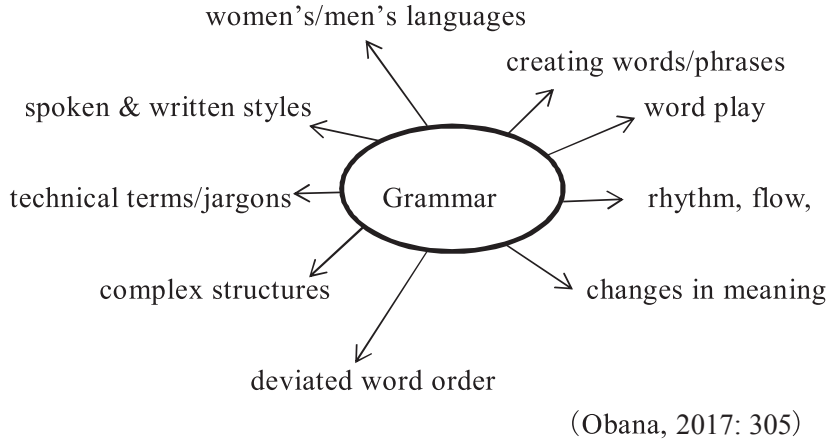
Eelen (2001) が、それまでのポライトネス研究は social norms を主張しているに留まっており、それは机上思考のポライトネスである。だから、ポライトネス研究はもっと実際の対話の分析を行うことで discursive (広範囲的) に捉えるべきである、と主張して以来、Watts (2003), Mills (2003), Locher & Watts (2005) らがそれに続き、結果 social norms という用語はポライトネス研究には非常に不適切なものであるかのように扱われてきた。それ以来、ポライトネス研究は断片的な会話を分析し、そのディスコースにおけるポライ

トネス判断を提示することに限定したり、対話の聞き手にインタビューして研究者の判断を投入しない方法が取られたりするようになった。何故このような傾向を生み出したのかと言えば、discursive approach を支持する研究者の多くが、social norms を固定的な規則の集合であると見做したからに他ならない。しかし、社会学では、上記に述べたように social norms という概念は、最も議論されてきたキーワードのひとつであるが、決してそのような不変的な規則として捉えてはいない。あくまで社会的基準であって、そこから「環境」に応じて適切に応用を効かせ、派生的に使用し、あるいは逸脱さえもあり得ると、見解が一致している（例：Parsons 1951; Hechter and Opp, 2001 [2005]; Baumann, *et al.*, 2010; Bicchieri, 1997 [2009], 2006; Heath, 2011; Xenitidou and Edmonds, 2014）。

確かに Eelen (2001) がそれまでのポライトネス研究が机上思考的であると批判した点は、新しいポライトネス研究へと導く画期的なものとなったが、しかしだからといって社会に生きる我々が基盤としているポライトネスの social norms をも批判するのは行き過ぎである。「ポライトネス判断」は何を基準に行うのか、という疑問が残るからである。Eelen が聞き手の判断のほうが重要視されるべきであると主張したが、それも一理あるとはいえ、聞き手であっても（誰であっても）「判断」をするための基準はどこにあるのだろうか、ということになる。

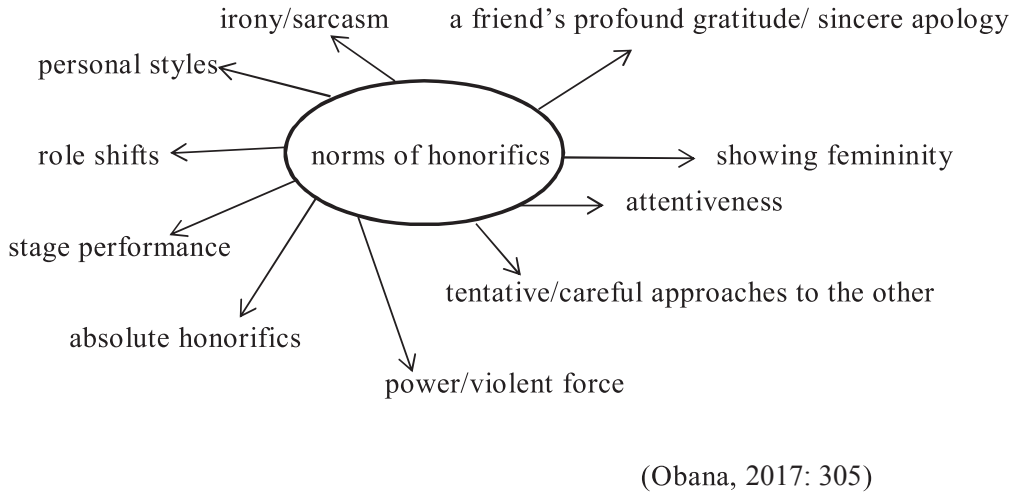
以上のように social norms を環境によって柔軟に応用、変化するものとして捉えた上で、本稿ではいわゆる敬意を表す敬語を social norms と見做し敬語の基準として扱う。ただし、これは（繰り返しになるが）敬語という言語形式に本来固有に敬意があるという意味ではなく、対人関係において適切だと判断される距離を図ることで敬意を表すことができるという意味における social norms のことである。そして前述の Bicchieri (2006) が社会における social norms を “grammar of society” と譬えたように、敬語を言語における文法に譬えて考慮する。

Obana (2017) は、文法は言語を駆使する人にとって、語句や文を構築する際に必要不可欠な基準として存在すると述べ、しかし一方で文法を基盤として踏まえた上で言語を自由に操り、応用したり逸脱したりしながらダイナミックな言語現象を産出することも可能であると説明している。次の図式1は文法とダイナミックな言語操作の関係を示す。



図式1：文法と多様な言語現象との関係

同様に、敬語においても規範的な敬語を基準にしながら、敬語という言語形式を操ることで様々な「環境」で、変化に富む語用論的意味を呈することが可能である。図式2がそれを示す。



図式2：規範的敬語と敬語の応用・派生的使用・バリエーションの関係

図式2は、規範的敬語、即ち norms of honorifics が基準となって、そこから派生的に敬語という言語形式が拡張する様相を表している。つまり、敬語が様々な場面や心理状態に応じてダイナミックに応用されて多様な語用論的意味をもたらすのである。第Ⅲ節で例示したプラスレベルシフトはこの拡張的な敬語使用の範疇に入る。

この拡張的な範疇には、一時的な敬語使用（プラスレベルシフト）以外に、不断の逸脱的敬語使用も含まれる。例えば personal styles という例が図に挙げられているが、これ

は敬語を使う相手でなくとも個人の習慣（あるいは主義）として常に敬語を使う場合を示す。例えば、ドラマ『相棒』の中で主人公である杉下右京は、どのような相手に向かっても敬語を話す。それはドラマで右京が紳士的でありながらもシニカルで誰ともそれほど親しく交わらない人物像を仕立て上げるのに効果的な方法のひとつだからである。上級クラスの女性が誰に対しても敬語を使用する「美化語」も不断的な敬語使用であるが、規範的敬語から派生したものとして図式2に組み込まれている。又、「絶対敬語」も現代でも存在する。皇太子が両親である天皇と皇后について記者会見で話をする時敬語を使用するが、それは現代における絶対敬語と言えよう。又神社で「参拝の方はこちらからお入り下さい」という掲示を見かけるが、「参拝」は謙讓語であるのに神社を訪れる人に対して使用するのは一見奇異である。しかし、この言葉は「神」への敬意を絶対視して使われているから、その掲示を掲げた人やそれを読んで理解する人全てが神に対して「参拝」という言葉を使う状況を示している。これも絶対敬語のひとつである。

前節で、規範的敬語とプラスレベルシフトに現れる敬語の使用背景には敬語起源の足跡が見られること、又、前両者の語用論的効果及び解釈も敬語の起源を軸に同方向を示すことを指摘した。本節では、さらに両者の関係を文法と言語現象の關係に譬えて、プラスレベルシフト（敬語を使う相手に対して一時的に敬語レベルが上がったり、敬語不使用の相手に対して一時的に敬語を使う）現象及び敬語の逸脱的使用は、いわゆる規範的敬語を基準にしながらそれを応用や派生という操作によって拡張されたものであることを示した。換言すると、敬語という言語形式は、様々な「環境」で駆使することでダイナミックに多様な解釈を生み出すことができる特質を持っている。しかし、それらの多様な現象は独自に存在しているわけでも、個人のまったくの自由な操作に任されているわけでもなく、敬語の起源に集約され、又規範的敬語が基準となって機能しており、共有の要素を多分に所有しているのである。

V おわりに

本稿では、敬語の起源を探索することで、敬語の元々持つ特質を明らかにし、それが現代敬語にどのように反映されているのかを調べた。本稿では、敬語の起源は神々への「祝詞」に発し、神々に対して人間がどのように接したのかを示す言葉として敬語が発達したという説を本稿で取り扱った。この祝詞説では、神と人間の間には「距離」があり神は「ソト」にいる、神を「上位」として崇め、様々な要求をしながらも神に対する「畏怖」の念を持ち、「慎重」にしかも「感謝」を持って崇めるという態度が、神への「敬語」として発達したと言われている。それらは現代敬語にも通じるものがある。いわゆる規範的敬語は、対人関係における「距離を示す指標」(marking)であり、それが上位・疎の関係者に対して敬語という言語形式で証するのである。

本稿では、さらに敬語の規範的使用とともに、個人のストラテジーとして使用する敬語現象についても考察した。そして、後者は決して個々のコンテキストで荒唐無稽に現れるのではなく上記の敬語の起源から発しており、又規範的敬語の応用として個々の心理的な面を反映するものとして現れることを明らかにした。つまり、現代語の規範的敬語とストラテジーとして使用する敬語は、どちらも敬語の起源を根底に持ち、又後者は前者から派生したものであり、社会的又は心理的距離という違いはあるが、語用論的解釈や効果は共通の要素を多々所有しているのである。そのようなストラテジーがポライトネスを表すかどうかは本稿では詳しく考察しなかったが、表す場合もあれば（感謝など）そうではない場合（皮肉など）もあると思われるが、これについては別の機会に稽查したいと思う。

参考文献

- 浅田秀子 (2001) 敬語で解く日本の平等・不平等. 講談社現代新書.
- 浅田秀子 (2005) 「敬語」論—ウタから敬語へ. 勉誠出版.
- 浅田秀子 (2014) 敬語の原理及び発展の研究. 東京堂出版.
- Barke, Andrew (2011) Situated functions of addressee honorifics in Japanese television drama. In Bethan L. Davies, Michael Haugh and Andrew J. Merrison (eds.), *Situated Politeness*. London: Continuum International Publishing Co., pp. 111-128.
- Baumann, Michael, Geoffrey Brennan, Robert E. Goodin and Nicholas Southwood (2010) Introduction. In Michael Baumann, Geoffrey Brennan, Robert E. Goodin and Nicholas Southwood (eds.), *Norms and values: The role of social norms as instruments of value realisation*. Munich: Nomos, pp. 7-15.
- Bicchieri, Christine (1997 [2009]) Learning to cooperate. In Bicchieri, Christina, Richard Jeffrey and Brian Skyrms (eds.), *The dynamics of norms*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 17-46.
- Bicchieri, Christina (2006) *The grammar of society: The nature and dynamics of social norms*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, Lucien (2011) *Korean honorifics and politeness in second language learning*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Cook, Minegishi Haruko (1996) Japanese language socialization: indexing the modes of self. *Dicourse Processes* 22, pp. 171-197.
- Cook, Minegishi Haruko (2008) Style shifts in Japanese academic consultations. In K. Jones and T. Ono (eds.), *Style Shifting in Japanese*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, pp. 9-38.
- Cook, Minegishi Haruko (2011) Are honorifics polite? Uses of referent honorifics in a Japanese committee meeting. *Journal of Pragmatics* 43, pp. 3655-3672.
- Eelen, Gino (2001) *A critique of politeness theories*. Manchester: St. Jerome.
- Geyer, Naomi (2008) Interpersonal functions of style shift: The use of plain and masu forms in faculty meetings. In Kinberly Jones and Tsuyoshi Ono (eds.), *Style shifting in Japanese*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, pp. 39-70.
- 萩野貞樹 (2005) 本当の敬語. PHD 新書.
- Heath, Joseph (2011) *Following the rules — Practical reasoning and deontic constraint*. NY: Oxford University Press.

- Hechter, Michael and Karl-Dieter Opp (2001 [2005]). What have we learned about the emergence of social norms? In Michael Hechter and Karl-Dieter Opp (eds.), *Social norms*. New York: Russell Sage Foundation, pp. 394-415.
- Ikuta, Shoko (1983) Speech level shift and conversational strategy in Japanese discourse. *Language Science* 5, pp. 37-53.
- 石崎晶子 (2000) 「電話連絡の会話におけるスピーチレベルシフト」. 言語文化と日本語教育. お茶の水女子大学, pp. 62-74.
- Jorensen, Julia (1996) The functions of sarcastic irony in speech. *Journal of Pragmatics*, 26, pp. 613-634.
- Jautz, Sabine (2013) *Thanking Formulae in English-Explorations across varieties and genres*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 蒲谷宏 (2003 [2013]) 「表現行為」の観点から見た敬語. 菊地康人 (編) 朝倉日本語講座第8巻, 敬語. 朝倉書店, pp. 53-72. (第5刷)
- 熊井浩子 (2003 [2013]) 「待遇表現」の諸側面と, その広がり: 狭く捉えた敬語, 広く捉えた敬語. 菊地康人 (編) 朝倉日本語講座第8巻, 敬語. 朝倉書店, pp. 31-52. (第5刷)
- 金田一京助 (1959 [1962]) 日本の敬語. 角川新書. (第5版)
- メイナード, K. 泉子 (2001) 恋するふたりの感情言葉: ドラマ表現の分析と日本語論. 東京: くろしお出版.
- Locher, Miriam and Richard J. Watts (2005) Politeness theory and relational work. *Journal of Politeness Research* 1 (1), pp. 9-34.
- Mills, Sara (2003) *Gender and politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 南不二男 (1977) 「敬語の機能と敬語行動」辻村俊樹 (編) 岩波講座, 日本語4敬語. 岩波書店, pp. 1-44.
- 三輪正 (2000) 人称詞と敬語. 人文書院.
- 宮地裕 (1981 [1992]) 敬語史論. 森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明 (編) 「講座日本語学9 敬語史」明治書院, pp. 1-25. (第3版)
- 村上重良 (1977) 天皇の祭祀. 岩波新書.
- 西田直敏 (1987 [1995]) 敬語. 東京堂出版. (第3版)
- 西田直敏 (1988) 日本人の敬語生活史. 翰林書房.
- 西田直敏 (2003 [2013]) 「敬語史と現代敬語」菊地康人 (編) 朝倉日本語講座第8巻, 敬語. 朝倉書店, pp. 225-251. (第5刷)
- 尾鼻靖子 (2016) 「日本語の敬語再・再考: 役割アイデンティティの観点から」関西学院大学言語教育研究センター紀要, 言語と文化第19号, pp. 31-46.
- Obana, Yasuko (2016) Speech level shifts in Japanese: A different perspective — the application of Symbolic Interactionist role theory. *Pragmatics*. 26 (2), pp. 247-290.
- Obana, Yasuko (2017) Japanese honorifics re-re-visited. *Journal of Politeness Research*, 13 (2), pp. 281-311.
- Obana, Yasuko (in press) Japanese politeness. In Patrick Heinrich (ed.) *The Routledge Handbook of Japanese Sociolinguistics*. London: Routledge.
- Okamoto, Shinichiro (2009) Politeness and perception of irony: Honorifics in Japanese. *Metaphor and Symbol* 17, pp. 119-139.
- Parsons, Talcott (1951) *The social system*. NY: Routledge.

櫻井光昭 (1983) 敬語論集：古代と現代. 明治書院.

Shibamoto-Smith, S. Janet (2011) Honorifics, “politeness”, and power in Japanese political debate. *Journal of Pragmatics* 43, pp. 3707-3719.

竹田直子 (2011) 同一談話におけるスピーチレベルシフトについての考察. 関西学院大学言語コミュニケーション研究科修士論文.

滝浦 真人 (2005) 日本の敬語論. 大修館.

Toplak, Maggie and Katz, Albert N. (2000) On the uses of sarcastic irony. *Journal of Pragmatics*, 32, pp. 1467-1488.

辻村俊樹 (1989) 「待遇表現と日本語教育」日本語教育69号, pp. 1-10.

渡辺実 (1973) 「上代・中古敬語の概観」林四郎, 南不二男 (編), 敬語講座第2巻, 上代・中古の敬語. 明治書院, pp. 7-27.

Watts, Richard J. (2003) *Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.

Xenitidou, Maria and Bruce Edmonds (2014) The conundrum of social norms. In Maria Xenitidou and Bruce Edmonds (eds.), *The complexity of social norms*. Heidelberg: Springer, pp. 1-8.

引用した辞書・事典

Oxford Dictionary of Sociology (edited by John Scott) 2014, the 4th edition (first published in 1994). Oxford: Oxford University Press.

Concise Encyclopedia of the World (edited by Keith Brown and Sarah Ogilvie), 2009. Oxford: Elsevier.

現代日本語における敬語の起源の形跡

尾 鼻 靖 子

本稿では、敬語の起源とその背景を探索することで、敬語が元来所有する特質を明らかにし、それがどのように現代敬語に足跡を残しているかを調べる。敬語の起源を、村上(1977)や浅田(2001, 2005, 2014)が唱える「祝詞説」に求め、古代の神々に対して畏怖、崇め、訴えなどを表現するために発達した言語形式であると捉え、それが現代敬語にも多分に保持されている点に言及する。そして、現代敬語では敬語は必ずしも敬意を表すだけに使用されるのではなく、スピーチレベルシフトなどに見られる個々のストラテジーとして心理的なシフトとして表現する手段としても用いられたりするが、このような一見逸脱的と見られるような敬語使用も、敬語の起源の要素を多分に維持していることを検証する。さらに、いわゆる敬意を表す「規範的な敬語」も個人が一時的に心理的な変化に伴ってストラテジーとして使用する敬語表現も別個のものとして存在するのではなく、敬語の起源を基本に、同じような動機を所有しており、両者は同じカテゴリーに属する“two ends of continuum”(Obana, 2017)として同列のものであると結論する。